

# 利用者の声

## 利用者の要望

農学部 多田幹郎

排水処理施設の第Ⅲ期工事も完了し、津島地区における環境管理のシステムは完成したと云われる。施設が作られ、管理・運営組織が設置されても、利用者の協力がなければ、環境保全の実効は上らないことは言うまでもないことである。管理にたずさわる者と利用者との協力関係は、前者からの要請だけでは成立せず、後者の要望も受け入れられることによって強力になるものとする。

利用者として、私が強く要望することは次の三つである。

### (1) 無機及び有機廃液の貯留庫の完備

私の属する研究室では11種類の実験廃液貯留用容器（重金属、水銀、シアン、現像液、定着液、酸・アルカリ、可燃性有機溶媒、低沸点溶媒、含塩素溶媒、含窒素溶媒）が必要である。11種類であって11個ではない。なにしろ処理は半年に1回だから、容器の個数は増加する。そして最盛期（？）には、30個を越す容器が、貴重な実験スペースを占有することになる。満杯になった容器を貯蔵する倉庫を設けて欲しいと思うのは私だけではないと思うのですが。

### (2) 有機廃液処理のスピードアップ

私は有機廃液処理施設の完成時から毎回、約300ℓの有機廃液を燃焼処理を行ってきた。幸にも、私の処理する廃液は素性（？）が良いため、複雑な前処理や灯油の添加を必要としない。しかし、300ℓを燃焼処理するのに丸2日を要するのである。これが年に2回あるのである。体制の整った今日、環境管理センターが次の重点項目として、有機廃液処理のスピードアップを取り上げることが望む利用者は多いと思う。

### (3) 利用者会議の開催

利用者は環境保全の重要性を十分に認識し、環境汚染物質である実験廃液を排出者自身が処理しようとする基本姿勢に異論を持たないであろう。しかしながら、処理の実施者としての立場から、労力と時間は出来るだけ費したくないと思っているであろう。従って、利用者は現在の運用方式に決って不満がない訳でなく、常に、より省力、より効率的にと要望は絶えることはないと思われる。冒頭に書いたように、管理にたずさわる者は利用者の要望を真剣に受けとめることが必要であろう。現在の環境管理センターの管理・運営組織を見ると、実際に研究室から廃液を運び2日も3日もかけて処理する人の意見が取り入れられるようには思えない。新しい体制が確立した今、一度利用者の生の声を聞く会を開催されるよう要望する。きっと、その会は環境管理センターの発展に役立つと信じるから。